

奈良文化財研究所紀要

2002

独立行政法人 文化財研究所

奈良文化財研究所

奈良文化財研究所紀要

2002

目 次

| | |
|---------------------------------|----|
| I 研究報告 | 1 |
| 古代建築における殿堂形式と庁堂形式 | 3 |
| 興福寺の子院絵図 | 6 |
| 醍醐寺三宝院庭園の築造に関する小考 | 8 |
| 観光資源としてのコパン遺跡 | 10 |
| イラワジ河岸の旧石器 | 12 |
| 骨角器の製作技法についての予察 | 14 |
| 年輪年代から見た古墳時代の始まり | |
| - 勝山古墳出土木材の分析から - | 16 |
| デジタルX線ラジオグラフィ | |
| - CR法による出土遺物への応用 - | 18 |
| レーザーラマン分光法による無機顔料の分析 | 20 |
| アンコール遺跡群 タニ窯跡群の保存整備計画 | 22 |
| 高句麗および百済の都城と瓦 | 24 |
| 平城宮の宝幢遺構 | 26 |
| 平城宮第一次大極殿院回廊基壇の復原 | 27 |
| 平城宮東院地区の造営年代 | |
| - 周辺条坊道路施工の実態から - | 30 |
| 平城京の条坊設定方式について | |
| - 山中章氏の説に対する批判 - | 34 |
| 近代奈良の牛乳壺 | 38 |
| キトラ古墳の予備調査 | 40 |
| 大官大寺下層土坑出土の貯蔵器と煮炊具 | 42 |
| 平城宮初期軒丸瓦の紋様をめぐって | 44 |
| 平城宮第一次大極殿院磚積擁壁の平面形について | 46 |
| 古墳時代の金・銀製耳環の材質と製作技法をめぐる考察 | 48 |

| | | |
|-----|-----------------|------------|
| II | 飛鳥・藤原宮跡等の調査概要 | 51 |
| 1 | 藤原宮の調査 | 53 |
| | 東南官衙地区の調査 | 第118次 54 |
| | 大極殿院の調査 | 第117次 56 |
| 2 | 藤原京の調査 | 57 |
| | 左京七条一坊の調査 | 第115次 58 |
| | 本薬師寺の調査 | 第114-3次 64 |
| 3 | 飛鳥地域等の調査 | 65 |
| | 石神遺跡の調査 | 第116次 66 |
| | 石神遺跡の調査 | 第114-1次 71 |
| | 奥山廃寺(奥山久米寺)の調査 | 第114-8次 72 |
| III | 平城宮跡等の調査概要 | 75 |
| 1 | 平城宮の調査 | 77 |
| | 第二次朝集殿院南門の調査 | 第326次 78 |
| | 第一次大極殿院西樓の調査 | 第337次 80 |
| | 大膳職北方の調査 | 第332次 83 |
| | 内裏北外郭北方の調査 | 第339次 84 |
| 2 | 平城京と寺院の調査 | 85 |
| | 興福寺中金堂の調査 | 第325次 86 |
| | 興福寺一乗院跡の調査 | 第330次 98 |
| | 興福寺一乗院跡の調査 | 第328次 108 |
| | 旧大乘院庭園の調査 | 第336次 112 |
| | 興福寺旧境内の調査 | 第327次 122 |
| | 法華寺旧境内の調査 | 第331次 126 |
| | 薬師寺旧境内の調査 | 第338次 128 |
| | 西大寺の調査 | 第335次 130 |
| | 左京三条二坊(長屋王邸)の調査 | 第329次 131 |
| | 英文目次 | 134 |

例 言

- 1 本書は、独立行政法人文化財研究所 奈良文化財研究所が2001年度におこなった調査研究の報告である。
- 2 本書は、Ⅰ 研究報告、Ⅱ 飛鳥・藤原宮跡等の調査概要、Ⅲ 平城宮跡等の調査概要、の3部構成である。Ⅱは飛鳥藤原宮跡発掘調査部、Ⅲは平城宮跡発掘調査部がおこなった発掘調査の報告であり、Ⅰにはそれを除く各種の調査研究報告を収録した。調査次数は、Ⅱが飛鳥藤原の次数、Ⅲが平城の次数を示す。2002年1月以降に開始した発掘調査については、本書では略報にとどめ、正式な報告は『紀要2003』に掲載する予定である。
- 3 執筆者名は、各節または各項目の末尾に明記した。発掘調査の報告は、原則的に調査担当者が執筆にあたり、遺物については各整理室の協力を得た。
- 4 当研究所の過去の刊行物については、以下の例のように略称を用いている。

| | | |
|-------------------------|---|------------|
| 『奈良文化財研究所紀要2001』 | → | 『紀要2001』 |
| 『奈良国立文化財研究所年報2000-Ⅰ』 | → | 『年報2000-Ⅰ』 |
| 『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅳ』 | → | 『藤原報告Ⅳ』 |
| 『平城宮発掘調査報告Ⅸ』 | → | 『平城報告Ⅸ』 |
| 『飛鳥・藤原宮発掘調査概報26』 | → | 『藤原概報26』 |
| 『1995年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』 | → | 『1995平城概報』 |
| 『飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報14』 | → | 『藤原木簡概報14』 |
| 『平城宮発掘調査出土木簡概報35』 | → | 『平城木簡概報35』 |
- 5 遺構図の座標値は、改正前測量法の平面直角座標系第Ⅵ系によるもので、2002年4月1日施行の改正測量法による新しい平面直角座標系への座標変換はおこなっていない。高さは、東京湾平均海面を基準とする海拔高であらわす（日本水準原点：H=24.4140m）。
- 6 発掘遺構は、遺構の種別を示す以下の記号と、一連の番号の組合せにより表記する。
SA（塀・柵）、SB（建物）、SC（回廊）、SD（溝）、SE（井戸）、SF（道路）、SG（池）、SH（広場）、SK（土坑）、SS（足場）、SY（窯）、SX（その他）
- 7 藤原宮内の地区区分については、『藤原概報26』（1996・3頁）を参照されたい。
- 8 藤原京の京域は、岸俊男の12条×8坊説（1坊=4町=約265m四方）を越えて広がることが判明している。南北の京極は未確定であるが、東西京極の確認をうけて、本書では10条×10坊（1坊=16町=約530m四方）の京域を模式的に示した。ただし、混乱を避けるため、条坊呼称はこれまでどおり、便宜的に岸説とその延長呼称を用いている。
- 9 7世紀および藤原宮期の土器の時期区分は、飛鳥Ⅰ～Ⅴとあらわす。詳細については、『藤原報告Ⅱ』（1978・92～100頁）を参照されたい。
- 10 平城宮出土軒瓦・土器の編年は、以下のようであらわす（カッコ内は西暦による略年代）。
軒瓦：第Ⅰ期（708～721）、第Ⅱ期（721～745）、第Ⅲ期（745～757）、第Ⅳ期（757～770）、第Ⅴ期（770～784）
土器：平城宮土器Ⅰ（710）、Ⅱ（720）、Ⅲ（740）、Ⅳ（760）、Ⅴ（780）、Ⅵ（800）、Ⅶ（825）
- 11 本書の編集は、Ⅰ 小野健吉、Ⅱ 内田和伸、Ⅲ 次山 淳 が分担しておこなった。巻頭図版および中扉のデザインは、中村一郎が担当した。また、英文目次は小野と次山が作成し、ウォルター・エドワーズ天理大学教授の校閲を受けた。